

## 神秘の人、ウィリアム・ゴールディング

アスキュー・デイヴィッド

英国の作家、ウィリアム・ゴールディング (William Golding, 1911-1993) の生涯と作品について論じたジョン・ケアリー (John Carey) の近著、『ウィリアム・ゴールディング——「蠅の王」を書いた男』(William Golding: The Man Who Wrote *Lord of the Flies*) は、英語で公になった初めての本格的な評伝である。ケアリー自身も認めているように、副題の『蠅の王』を書いた男』には皮肉が込められている。というのも、ゴールディングには、彼の代表作として知られる『蠅の王』(*Lord of the Flies*, 1954) の作者という以外にも様々な顔があり、そうした多面性を描き出すことこそがこの評伝の狙いだからである。

『ウィリアム・ゴールディング』の背景には、ケアリーの伝記作家としての幸運が大きく絡んでいる。というのも彼は、この伝記を執筆するにあたり、これまで公刊されてこなかったゴールディングに関する膨大な資料を手に入れたからである。事実、ケアリーの労作にはこれらの資料が駆使されており、今後のゴールディング論においても貴重な資料的価値を持ち続けることは間違いない。

では、具体的にケアリーはどのような資料を手に入れたのか。まず、ゴールディングの父親の手記である。ゴールディングに最も影響を与えたこの人物は、読書好きな無神論者で、社会主義者であり、学校教師をしていたが、この手記はその父親の内面世界を如実に伝えてくれる。

次に、ゴールディングの出版社、フェイバー・アンド・フェイバー社が提供した資料である。特に興味深いのは、ゴールディングとフェイバー社の編集者、チャールズ・モンテイス (Charles Monteith) との往復書簡である。ゴールディングがフェイバー社に『蠅の王』の原稿を送ったとき、フェイバー社は当初この

作品を一顧だにしなかった。審査にあたった評者によれば、それは、「馬鹿げた、面白みに欠けるファンタジー」であり、「下らなくて、退屈で、意味のない」作品に過ぎないという。<sup>②</sup> こうした不評を受け、一度は出版を却下される羽目になった作品を救い出したのが、他ならぬモンテイスだったのである。<sup>③</sup> これは一九五三年のことであったが、モンテイスとゴールディングとの関係は、以後ゴールディングの亡くなる一九九三年まで、四〇年間続くことになる。ケアリーは、このフェイバー社のアーカイブに眠っている資料を、作品論を展開する際に効果的に駆使している。

最後に、評伝誕生をもたらした決定的な資料はゴールディングのファミリー・アーカイブである。上に挙げた二つは大変貴重な資料に相違ないのだが、これに比べたら、見劣りするといわねばならない程、この最後の資料は重要である。というのも、このアーカイブにより、ゴールディング自身の人生、内面の葛藤を知ることができるようである。これはまさに宝の山であり、未刊の小説や既刊の小説の初稿から、二つの伝記的作品、そして五〇〇〇頁にも及ぶ手記が含まれている。

ケアリーは資料に正直に、共感をもって接しており、その営みは力強く、洞察力に優れた評伝として結晶している。評伝は二つの要素からなっている。一つはゴールディングの個々の作品にまつわる事実を機械的に述べた部分で、原稿の校正がどのような過程を経て行われたか、出版部数はどれくらいあったか、出版報酬はどれくらいだったか、個々の作品が主として新聞紙や総合雑誌などのマス・メディアでどのように評価されたかなど、小説家ゴールディングに関するややドライな記述がなされている。もう一つは人間ゴールディングの伝記的な事実を述べた部分であり、これははるかに生き生きとした、魅力的な叙述となっている。ケアリーはゴールディングの人間としての長所も短所も描いているが、これらは、これまで知られることのなかった暗く、神秘的な作家の素顔を描き出している。

幽霊や怪物を恐れていたという、感受性豊かな、想像力逞しい少年であった  
 ゴールディングは、当時の相対的に貧しい家庭の秀才のお決まりのコース——公  
 立のグラマー・スクールから、オックスフォード大学、そして学校教師という  
 コース——を辿った。

ゴールディングの父親は一九〇五年からモールバラにある公立のグラマー・ス  
 クールで科学の教師を務めており、ゴールディング自身も一九二一年から  
 一九三〇年まで、同学校に在籍した。モールバラにはもう一つ、モールバラ・カ  
 レッジという私立学校があり、そこに通う特権階級の子弟を目的の当りにし、屈  
 辱を感じたことが、ゴールディングの一生に影を落とすこととなる。半世紀後の  
 一九七〇年代になっても、彼はコンプレックスの余り悪夢にうなされ続けたので  
 ある。ゴールディングは次のように述懐している。モールバラ・カレッジの青年  
 紳士の「上品な立ち振る舞いに比べて（……）自分は何と汚らしく、みすぼらし  
 い姿であったことか」<sup>④</sup>。

一九三〇年にオックスフォード大学に進んだゴールディングは、父親が学校で  
 教えていた自然科学を専攻するが、一九三二年に英文学に専攻を転じてしまう。  
 大学では、モールバラで植えつけられた階級コンプレックスにより拍車がかかっ  
 た。ケアリーは当時の大学における階級意識の強さを強調しているが、これが、  
 ゴールディングのコンプレックスを一層刺激することとなったのである。当時の  
 大学側によるゴールディングの就職先を相談する面接に基づく報告書によれば、  
 彼は「今ひとつ」(Not Quite)、つまりオックスフォード用語で、紳士というには  
 不十分であり、また N・T・S・(Not Top Shelf)、つまりトップクラスの紳士で  
 はない、と書かれている。後にも、「紳士としては不十分だが、公立学校の教師  
 としては充分」と報告されている<sup>⑤</sup>。

ゴールディングは特権階級に対する憤懣を生涯拭い去ることができなかった。  
 若き日に、彼が何故モールバラ・カレッジの生徒に対して「嫌悪と憧憬」を覚え  
 たのかはなるほど理解できる。しかしゴールディングは、一九六六年に CBE

(大英帝国勲章第三位)を、一九八〇年に『通過儀礼』(Rites of Passage)でイギリ  
 スの最も権威ある文学賞であるブッカー賞を受けた<sup>⑥</sup>。そして一九八三年にノーベ  
 ル文学賞、一九八八年には騎士の称号まで与えられ、名声と富をほしのままにし  
 たのである。それにもかかわらず、階級コンプレックスをついに克服できなかった  
 ことは理解しかねるところであるが、いずれにしろ、ケアリーの評伝ではコン  
 プレックスの塊としてのゴールディングが上手く描かれている。

今日の読者は伝記において驚愕的な事実が暴露されることを期待しているが、  
 ケアリーは幸運にも、ゴールディングの未刊の伝記的作品の中に、こうした期待  
 に応えられる資料を発見した。最も衝撃的なのは、ゴールディングが若き日のレ  
 イプ未遂について自責しているところである。レイプ未遂は彼がオックスフォ  
 ード大学に在籍しているときに起こった。被害者の十五歳の少女は、彼の父親の生  
 徒の一人であり、「キスされたり、抱きつかれたりすることは決して嫌ではな  
 かったが、ゴールディングが胸部を触り出したとたん、恐怖で一杯になった」と  
 いう<sup>⑦</sup>。ゴールディングは彼女を押しさえつけようとしたが、彼女が泣き出したので  
 手を離し、レイプは未遂に終わった。数年後、彼は再び彼女との性交渉を試み  
 る。彼の父親の同僚が彼女と付き合っていたことで、(お仕置きとして)彼女のお  
 尻を鞭で打ち、真つ赤な傷痕をみたゴールディングは、「不気味な快感」を覚え  
 たという<sup>⑧</sup>。ゴールディングは後には自分の中には、ナチと同じサディスティックな  
 傾向があり、ナチス・ドイツが何故あのように野蛮に振舞ったのかは理解でき  
 る、と述べているほどである。

一九三四年、ゴールディングはオックスフォード大学を卒業し、処女作である  
 詩集を『詩集』(Poems)——これはあまりにも想像力に欠けるタイトルといわれ  
 ばなるまい——として出版している<sup>⑨</sup>。一九三五年、父親と同様教師となり、教育  
 学でディプロマを取得するため、一九三七年にオックスフォード大学に戻る。  
 一九四〇年、海軍に入隊し、ビスマルク戦艦の追撃に参加し、ノルマンディ上陸  
 作戦(いわゆるD-Day作戦)にも参加した。戦後は再び教職に戻っている。

教師としては、ゴールディングは全くの出来損ないだったという他ない。演劇を教えることは楽しんだようだが、新任の教師が自分の地位を脅かしはじめる、被害妄想で一杯になった。ゴールディングは二〇年経っても、このライブル教師についての悪夢にうなされ続けたという。

『蠅の王』がいかに高い評価を得たのかは、一九六一年から一九六二年にかけてのアメリカ滞在中のエピソードから明らかである。米国のホリンス女子大学に招待され講演活動などをしてきたゴールディングは、『タイムズ』誌によって「キャンパスの王」として歓迎されたのである。この『蠅の王』の成功によって、ゴールディングは教職を辞し、作家として独立できることになる。ケアリーは「ゴールディングの最初の小説が成功したことに対する複雑な憤懣やるかたない気持ち」について論じている。ゴールディング自身はこの作品をマイナーな作品として考えており、にもかかわらず自分の名声がこの作品によって作り上げられたことに不満を感じていたようだ。彼はこの成功からくる収穫を「モノポリーマネー」、つまり玩具のようなお金、と呼んでいる。<sup>④</sup>

ケアリーの描くゴールディングは欠陥だらけの人物である。大酒飲みで、酒癖が悪く、家族や友人に対して心無い行動をとることがあった。金銭に対する態度ときたらせせこましく、滑稽ですらある。一九八七年に友人が亡くなったときなど、その悲しみと収入税で五万二千ポンドを払わされたことと、どちらが悲しいだろうかと比べたりしているのである。伝記で読む分には面白いエピソードではあるが、一緒に生活するには大変な人物であったことは想像に難くない。ゴールディングは、「人間というものは、蜂が蜜を作り出すように、悪を作り出す」動物だと確信しており、自分の心の中を覗き見るだけで「全ての邪悪さ」を知ることができると考えていた。自分の手記が後世の伝記作家に読まれるであろうことを知っていた彼は、自分の手記を読んで、読者は自分の内面の暗黒部を直視し、「自分のことをモンスターだと結論づけるだろう」と記している。事実、彼の手記や小説は、女性に乱暴してしまいたい、というサディスティックな欲望が

時折顔を出す、如何にも怪物じみたものである。

このように、暗さがつき纏うゴールディングだが、明るいエピソードもないわけではない。スノードン卿ことアントニー・アームストロング・ジョーンズ——ゴールディングは彼のことを「うすのろ写真家」と呼んでいたが——があるとき、ゴールディングに向かって、僕は君の大ファンでね、『指輪物語』は特に気に入っているよ、といった（『蠅の王』「ロード・オブ・ザ・フライズ Lord of the Flies」を語呂の似ている『指輪物語』「ロード・オブ・ザ・リングズ Lord of the Rings」と間違えた）。これにはゴールディングも苦笑せざるをえなかったであろう。また一九八八年に騎士の称号を得たとき、自分の性格上の限界を意識して、ジェイン・オースティン（Jane Austen, 1775-1817）の『高慢と偏見』を紐解いて、そこに登場する成り上がり紳士、サー・ウィリアム・ルーカス（Sir William Lucas）に関するオースティンの辛口評を自分に当てはめている。その評とは、「彼は、騎士の称号にあるいは過度に舞い上がったのかも知れない」というものだ。<sup>⑤</sup> といってもこうした自嘲をよそに、受賞後、ゴールディングはパスポートの名前にサー（騎士の称号）を書き足すことは抜け目なく行っていたのだが。

伝記的事実に加え、ケアリーは各々の小説の内容や英国の新聞・雑誌に寄せられた書評などを紹介している。ケアリーは伝記的事実によって未刊原稿を含む作品に光を当てようとしている。ゴールディングが書こうとして書かなかった本には、彼の趣味に関するものがある。彼には、チェスやガーデンニングなどいくつかの趣味があったが、その本では、古代ギリシャ語、船、音楽、そして考古学という四つの趣味が扱われることとなっていた。船と考古学はゴールディングの想像力を強く刺激するものであった。そもそも海というのは、表面の眼にみえる既知の側面と海底の眼にみえない未知の側面との両方を備えている両義的な存在である。考古学は地面を掘り崩すことにより、地下に潜む事実、歴史の謎を解く営為でもある。ゴールディングがかつていったように、「地表の下に輝く暗黒があり、かかる暗黒の中から、過去の人間が鮮やかな色合いで次々と踊り出してく

る<sup>⑧</sup>。海も地表も肉体と精神の葛藤を表す隠喩と目することができよう。表面と未知の奥底は理性（科学）と信仰（宗教）とも比べられる。ゴールディングは神秘主義や宗教の力を信じており、父親の無神論的合理主義には（少なくとも大人になってからは）我慢がならなかった。

良い伝記は書かれている作家の作品を再び読みたいと思わせるものだ。更に優れた伝記は作品を再び読む際に、新しい視点を提供するものだ。ケアリーの伝記は後者に当たると。この伝記の強みは読者にゴールディングの作品を読む際、各々のエピソードや語句の意味を改めて考えさせる点にある。ゴールディングの小説は、その濃厚濃密で重層的な多義性で知られており、またその主要なテーマの一つが原罪で、人間一人ひとりの心に潜む「内なるナチズム」であることはよく知られている。ケアリーは無論これらに言及しているが、多くの読者にとって新しいのはゴールディングの神秘的側面が強調されている点であろう。ゴールディングは父親の無神論に反旗を翻し、父親の教える自然科学、父親の強調する理性では知ることが到底できない現象にも強い関心を有していた。事実、ゴールディングの神秘主義を念頭に置きながら個々の作品を読むと新しい視点が開けてくる。評者は例えば『可視の闇』の中の「物事を隠す屏風」という表現の持つ意味について考えさせられた<sup>⑨</sup>。あるいは『狭苦しい空間』（*Close Quarters*）の一節にもゴールディングの神秘主義を窺わせる箇所がある。『狭苦しい空間』は船を舞台としているが、航海中の船の底を洗うのに引網が使われる場面で、引網が功を奏し、おびただしい量の海藻が船の底から外され、海上に浮上する。浮上してきた海藻の中から何か、海の表面に表れ、そして沈んでしまう。ゴールディングの言葉では、その何かの出現は、「深海の不確かな『事実』を無効にし、反対に身の毛もよだつ未知のものが存在することを浮き彫りにしていたかのようだった」という<sup>⑩</sup>。いずれも理性の力の及ばない不気味で神秘的な世界の存在を物語っている。ゴールディングは二〇一一年に生誕百周年を迎えるが、このときには研究書や伝記が更に世に出ることだろう。しかし、ケアリーの設定した基準は高い。この

評伝を機に、新しい世代の読者が『蠅の王』だけでなく、『後継者たち』や『ピンチャー・マーティン』、そして『通過儀礼』などにも眼を向けるようになることを願って止まない<sup>⑪</sup>。

## 注

- ① John Carey, *William Golding: The Man Who Wrote Lord of the Flies*, London: Faber & Faber, 2009. ケアリーは一九八六年出版の *William Golding, the Man and his Books: A Tribute on his 75th Birthday*, London: Faber, 1986 の編者でもある。なお、本稿は、拙稿 David Askew, "And So Much More ...", *Quadrant*, December 2009, pp. 122-123 を基に加筆訂正したものである。
- ② Carey, *William Golding*, pp. 151-152. Charles Monteith, "Strangers from Within", in John Carey ed., *William Golding, the Man and his Books*, pp. 57-63, at p. 57.
- ③ 『蠅の王』出版までの過程については、モンテイス自身による回顧録に詳しく Monteith, "Strangers from Within" を参考にされたい。
- ④ Carey, *William Golding*, p. 17.
- ⑤ Carey, *William Golding*, pp. 57, 70.
- ⑥ William Golding, *Rites of Passage*, London: Faber, 1980. 邦訳もある。ウィリアム・ゴールディング（伊藤豊治訳）『通過儀礼』開文社出版、二〇〇一年。
- ⑦ ふうせいでまなびが、ゴールディングは、自叙伝的作品である *The Pyramid* におけるこのレイプ未遂事件に言及している。William Golding, *The Pyramid*, London: Faber and Faber, 1966/1969（邦訳もある。ウィリアム・ゴールディング（井出弘之訳）『我が町、ぼくを呼ぶ声』集英社、一九八〇年）をみよ。
- ⑧ Carey, *William Golding*, p. 46.
- ⑨ Carey, *William Golding*, p. 56.
- ⑩ Carey, *William Golding*, pp. 57, 82.
- ⑪ これはベックミラン現代詩人叢書の一冊として出版された。William Golding, *Poems*, London: Macmillan, 1934 を参照されたい。
- ⑫ "Lord of the Campus", *Time*, 22 June 1962, p. 36. 同記事は、<http://www.time.com/time/magazine/article/0,9171,869976,00.html> にみられる。

- ⑬ Carey, *William Golding*, p. 363.
- ⑭ Carey, *William Golding*, p. 320.
- ⑮ Carey, *William Golding*, pp. 260, 194.
- ⑯ Carey, *William Golding*, p. 517.
- ⑰ Jane Austen, Pat Rogers ed., *Pride and Prejudice*, Cambridge: Cambridge University Press, 2006, p. 19.
- ⑱ William Golding, "Digging for Pictures", *Holiday*, March, 1963, pp. 86-87, 189-190. 後〇〇 William Golding, *The Hot Gates, and Other Occasional Pieces*, London: Faber, 1965, pp. 61-70, at p. 62 〇〇再版。 Carey, *William Golding*, p. 287 の引用に於て。
- ⑲ William Golding, *Darhness Visible: A Novel*, London: Faber and Faber, 1979, p. 16. 邦訳では「物事の仕組みを覆い隠している幕が震えてちよつとずれたようなものだ」となっている。 ウィリアム・ゴールドディング（福岡現代英国小説談話会訳）『可視の闇』開文社出版、二〇〇〇年、14頁。
- ⑳ 引用は、William Golding, *Close Quarters*, London: Faber & Faber, 1987/1988, p. 257 に於て。
- ㉑ William Golding, *The Inheritors*, London: Faber and Faber, 1955. William Golding, *Pincher Martin*, London: Faber and Faber, 1956. Golding, *Rites of Passage*. 邦訳もある。 ウィリアム・ゴールドディング（小川和夫訳）『後継者たち』中央公論社、一九八三年。 ウィリアム・ゴールドディング（井出弘之訳）『ビンチャー・マーティン』集英社、一九八四年。 ゴールドディング『通過儀礼』
- (立命館アジア太平洋大学准教授)